

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：35310

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580085

研究課題名(和文)ハンセン病療養所入所者の言語生活

研究課題名(英文)Language usage of residents in Hansen's disease sanatoriums

研究代表者

山根 智恵 (Yamane-Yoshinaga, Chie)

山陽学園大学・総合人間学部・教授(移行)

研究者番号：60269983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、岡山県長島にあるハンセン病療養所「長島愛生園」「邑久光明園」の入所者へのアンケート調査・インタビュー調査及び文献調査(愛生園の園誌『愛生』1931年～1985年の訪問者リスト)を行うことにより、隔離から解放へ向かった状況における言語接触・言語変容の様子を分析・考察した。その結果、(1)否定的な意味を持つ岡山方言の認知度が高い、(2)光明園のほうが岡山方言の認知度が低い、(3)愛生園では岡山方言を含めていくつかの方言を混在させて話す入所者がおり、関西出身者が多く関西方言使用の比率が高い光明園とは異なる、(4)訪問者は岡山県内に次いで関西地方からが多い、という傾向が見られた。

研究成果の概要(英文)：In Nagashima of Okayama prefecture there are two Hansen's disease (Leprosy) sanatoriums. One is Nagashima-Aiseien and the other is Oku-Komyoen. Through a questionnaire, interview and bibliographic survey, this study analyzed the language contact and language changes of residents in two sanatoriums under the circumstances of segregation to emancipation. The results were as follows:

(1) The percentage of recognition of the words of negative meaning in Okayama dialect was higher than of other words of Okayama dialect. (2) Residents of Komyoen recognized fewer Okayama dialect words and phrases. (3) Aiseien residents used a mixture of Kansai dialect, standard Japanese, Okayama dialect and other dialects. It was called Nagashima dialect among the residents. On the other hand, most of Komyoen residents used Kansai dialect because of the history of Komyoen (Komyoen residents had moved from Kansai because Komyoen was rebuilt after their sanatorium in Osaka was destroyed by typhoon).

研究分野：日本語学

キーワード：言語接触 言語変容 言語生活 岡山方言 関西方言 隔離 解放 方言受容

1. 研究開始当初の背景

ハンセン病は、感染性が弱いにもかかわらず、皮膚や末梢神経をおかされることで、被服に覆われない部位に障害が現れやすいことから、差別や偏見の対象になりやすかった。それも原因の一つとなり、昭和6(1931)年、国は「らい予防法」を施行し、強制収容、絶対隔離の政策を確立した。そのため、幼少期から、あるいはある程度の年齢に達してから、家族と離れて療養所生活を余儀なくされる人々が現れた。そのような人々が生活する療養所が岡山県には2か所ある。瀬戸内市の長島にある「長島愛生園」(以下「愛生園」とする)と「邑久光明園」(以下「光明園」とする)である。

愛生園は昭和5(1930)年に日本初の国立療養所として誕生し、最初の入所者はおもに東京の全生病院にいた患者であった。一方光明園は、大阪にあった外島保養院を前身とし、それが昭和9(1934)年の室戸台風の直撃を受けて壊滅したため、長島に再興されたという経緯を持つ。よって、光明園には関西出身者が現在も多く入所し、また愛生園は光明園より規模が大きかったため、入所者数は愛生園のほうが多いという特徴がある。

このように背景や入所者の出身地などの違いはあるものの、いずれの入所者も戦前から昭和30(1955)年代前半頃までは、簡単に島を出られる状況ではなかった。

変化が見られたのは昭和30(1955)年代である。病棟看護が患者から職員に替わり、徐々に園外からの勤務者が増え、また昭和33(1958)年からはバスレク(バスレクリエーション)が始まり、無菌の者はバスに乗って島外に出ることが許されるようになったのである。とはいえ、昭和63(1988)年の架橋まで交通の便が船のみであったため、自由にどこへでも、というわけにはいかなかった。

2. 研究の目的

1. で述べたように、入所者の環境は隔離から解放へと変化し、新たに療養所に入所する人はいない。高齢化が進み、両園共、入所者の平均年齢は80歳を超える。そのような中、愛生園・光明園では、「療養所を世界遺産に」「この歴史を残そう」という動きがある。

もちろん歴史的建造物の保存は重要である。しかし、それ以上に、人生の大部分を隔離された場所で送ってきた人々の言語生活を調査し、その記録を保存しておくことは急務である。

本研究では、長島に存在する療養所に隔離された人々の言語生活を、アンケート調査・インタビュー調査・文献調査から探ることで、隔離から解放へと向かった状況における言語使用の変化と普遍性について究明することを目的とする。

3. 研究の方法

3. 1. アンケート調査

3. 1. 1. 入所者への調査

(1) 調査内容

家族・配偶者・入所者・療養所職員・外部の人々との接触の有無、情報機器(テレビ・ラジオ・パソコン・電話など)との接触度

言語使用状況(出身地の方言使用度・理解度、岡山方言の使用度・理解度)

・「使う」「聞いたことがある」「使わないし聞いたこともない」から選択してもらう。

・岡山方言については以下の20を調査対象項目とした(括弧内は共通語)。

「ぼっけー(とても)」「でーれー(とても)」「ちばける(ふざける)」「おえん(だめだ)」「かなぐる(引っ掻く)」「きょーてー(恐ろしい)」「ひる(乾く)」「とらげる(片付ける)」「けっぱんずく(つまづく)」「すばろーしい(憂鬱な、不機嫌な)」「じりー(水分が多くて柔らかい)」「ひっさ(久しく)」「みてる(無くなる)」「おせ(大人)」「～じゃ(だ)」「～けー/けん(から)」「～まー(ないだろう)」「～ばー(ばかり)」「～やこー(など、なんか)」「～れー(なさい)」

(2) 調査人数

長島愛生園 18名

邑久光明園 18名

(3) 調査協力者の年齢

70代～90代

入所年数

約50年～80年

3. 1. 2. 岡山在住者・在学者への調査

(1) 調査内容

3. 1. 1. に同じ。おもに の岡山方言の使用度・理解度(入所者との比較のため)

(2) 調査人数

岡山在住者 29名

岡山在学者 15名(日本人6名、留学生9名)

(3) 調査協力者の年齢

10代～90代

3. 1. 3. 他県在住者への調査

(1) 調査内容

3. 1. 1. の調査協力者の出身地に在住する人々の方言使用度・理解度(入所者との比較のため)

(2) 調査人数

10名程度

(3) 調査協力者の年齢

50代～80代

3. 2. インタビュー調査

(1) 分析の観点

方言の種類(どのような方言が使用されているか。出身地の方言、岡山の方言、その他の方言)

言語の種類(在日の入所者については、韓国語の使用度・理解度について)

コードスイッチング(共通語と方言、日本語と韓国語の切り替えの状況に特徴があるか)

(2) 調査協力者

愛生園・光明園の入所者(愛生園 13 名、光明園 16 名)

岡山・愛知・神戸などに在住する高齢者

3.3. 文献調査

(1) 対象文献

愛生園の園誌『愛生』

昭和 6 (1931) 年～昭和 61 (1986) 年

「愛生日誌」(訪問者リストが載っている)

*一部欠号があったため、『愛生年報』(昭和 33 年)、『国立療養所長島愛生園創立 80 周年記念誌[第二部]振り返れば 80 年』年表も参照。

(2) 文献調査の理由

隔離された人々が園外に出ることは難しかったが、園への訪問は戦前から許可されていた。訪問者の言語が入所者の言語に影響を及ぼした可能性も否定できないことから、文献調査も行った。

4. 研究成果

現在も研究を継続しており、今後調査協力者が増える可能性がある。また、収集データの中には現在分析中のものもある。よって、4.1.では現時点で発表・執筆を終え、分析結果が公表されているもののみをまとめる。そして 4.2.では、今後の課題についてまとめる。

4.1. 研究成果

(1) アンケート調査の成果

愛生園・光明園共に、「使わないし、聞いたこともない」という入所者が皆無なのは、否定的な意味を持つ「おえん」「きょーてー」であり、この 2 項目の認知度が高かった。

「使わないし、聞いたこともない」人数が 8 割を超える岡山方言の数は、光明園が 7 項目、愛生園が 4 項目だった。また、「聞いたことがある」岡山方言の数が 11 以上の入所者は、愛生園が 15 名、光明園が 6 名だった。ここから、愛生園の入所者の方が岡山方言への認知度が高いことが窺えた。

個人差はあるものの、両園共に岡山県に近い地方の出身者の岡山方言認知度が高かった。

岡山県在住者と比較し、認知はしているものの、両園共に岡山方言使用度が低かった。

(2) インタビュー調査の成果

愛生園では、岡山方言を含めていくつかの方言を混在させて話す入所者がおり、関西出身者が多く、関西方言使用の比率が高い光明園とは異なった。

共通語、岡山方言、出身地の方言、その他の方言を混在させて話す話し方を、愛生園の入所者は「愛生弁」と呼んでおり、その混在した話し方をする入所者が存在した。

(3) 文献調査の成果

昭和 6 (1931) 年～昭和 19 (1944) 年
訪問者数(同日に同地方から複数名訪問している場合は「1」と数える)は 2,701 で、そのうち全体の 29.8%にあたる 804 が岡山県、12.6%にあたる 341 が近畿地方、以下海外 192、関東地方 185 と続いた。こういった訪問者については、基本入所者と話をする機会はなかったと思われるが(山陽高等女学校同窓会(1937)『みさを 創立 50 周年記念』93 号に、「講堂は中央の広間を挟んで前後にステージがあり、一方は患者専用、一方は手すり健康者専用と定められていて、ここへは患者は絶対に上がることを禁ぜられています」と記されている)訪問目的が野球の対抗戦、短歌・俳句・詩の指導の場合、言葉なくして行うことは不可能であるため、言語接触の可能性は否定できない。

昭和 20 (1945) 年～昭和 40 (1965) 年
訪問者数は 4,412 で、そのうち全体の 34.9%にあたる 1,538 が岡山県、16.3%にあたる 719 が近畿地方、以下海外 291、中国地方 266 と続いた。愛生園には、宗教関係者も多く訪れているが、特に浄土真宗については、兵庫教区から来園している。この時期はプロミンという特効薬により、無菌の入所者も増えたことから、言語接触の可能性は戦前より高まったと思われるが、岡山県・関西地方からの訪問者が多いことから、方言を聞いたとしても、岡山方言・関西方言が多かったことが推察される。

昭和 41 (1966) 年～昭和 60 (1985) 年
訪問者数は 7,309 で、そのうち全体の 37.5%にあたる 2,739 が岡山県、21.9%にあたる 1,603 が近畿地方、以下中国地方 540、関東地方 404 と続いた。この時期は、患者自治会発足 20 周年、邑久高等学校新良田教室開校 20 周年、愛生園創立 50 周年など、多くの記念式典や行事が行われ、多数の来賓や関係者が園を訪れた。また、盲人会のハーモニカバンド「青い鳥楽団」は大阪、京都、名古屋

屋、東京に向いて公演し、里帰りや他の療養所との宿泊を伴う交流も盛んに行われた。よって、訪問者に関しては岡山県、関西地方の人々と入所者との言語接触が多かったと思われるが、それ以外の地方の様々な言語を聞く機会も以前より大幅に広がったことが推察される。

4.2. 今後の課題

今後の課題は以下の5点にまとめられる。

(1) アンケート調査について

入所者の出身地の方言認知度と、入所者の出身地在住の高齢者の方言認知度とを比較する。

家族・配偶者・入所者・療養所職員・学部の人々との接触度調査も合わせ、広く言語生活の観点から分析・考察する。

(2) インタビュー調査について

既にテープ起こしが済んでいるインタビュー談話について、どのような言語使用が見られるかを分析・考察する。特に関西方言の影響、岡山方言の受容度、また入所者が「愛生弁」と称する共通語、岡山方言、出身地の方言、岡山・出身地以外の方言が混在した話し方についての分析・考察を、アクセントも含めて行う。

インタビュー内容にどのような語彙が多く出現するのか、そしてそれはどのような意味を持つのかなどについて、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて明らかにする。

(3) 文献調査について

昭和61(1986)年以降の『愛生』の分析・考察を行う。

(4) その他

在日の入所者の韓国語使用度・認知度についてまとめる。

ほぼ園内でしか認知できない特殊語彙があることが文献調査やインタビュー調査から明らかになった。この園内の特殊語彙の使用状況や認知度について分析・考察する。

植民地時代、日本と同じく隔離政策が行われ、現在もその地に居住している人たちがいる韓国・小鹿島、台湾・楽生療養院での調査を行い、言語研究の観点から隔離と解放の究明を行う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)(研究ノート)

山根(吉長)智恵(2017)「長島愛生園を

訪れた人々 - 昭和 41 年から昭和 60 年まで -」『山陽論叢』第 23 巻 pp.143-152
<http://www.sguc.ac.jp/library/books>

山根(吉長)智恵(2016)「長島愛生園を訪れた人々 - 昭和 20 年から昭和 40 年まで -」『山陽論叢』第 22 巻 pp. 127-135
<http://www.sguc.ac.jp/library/books?tid=1658>

山根(吉長)智恵(2015)「長島愛生園を訪れた人々 - 昭和 6 年から昭和 19 年まで -」『山陽論叢』第 21 巻 pp.165-171
<http://www.sguc.ac.jp/library/books?tid=1667>

[学会発表](計 3 件)(研究会、発表予定を含む)

Chie Yamane-Yoshinaga, Megumi Kukita(2017) “Dialect usage of residents in Hansen’s disease(Leprosy) sanatoriums” Methods in Dialectology XVI 2017 (poster session) 2017.8.7-11, National Institute for Japanese Language and Linguistics (Tokyo, Tachikawa-city)

山根(吉長)智恵・久木田恵(2016)「ハンセン病療養所入所者の方言受容」『平成 28 年度日本語学会春季大会』(ブース発表)2016 年 5 月 15 日 於: 学習院大学(東京都豊島区)
『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』pp. 183-188
『日本語の研究』第 12 巻第 4 号(2016.10.1) p.202

山根(吉長)智恵(2015)「長島愛生園を訪れた人々」『岡山国語談話会』2015 年 3 月 21 日 於: 岡山大学(岡山県岡山市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山根(吉長) 智恵
(Chie, YAMANE-YOSHINAGA)
山陽学園大学・総合人間学部・言語文化学科・教授
研究者番号: 60269983

(2) 研究協力者

久木田 恵 (Megumi, KUKITA)
椋山女学園大学・非常勤講師

朴 珍希 (Jinny, PARK-CRAIG)
山陽学園大学・非常勤講師

田村 朋久 (Tomohisa, TAMURA)
長島愛生園・学芸員

徳 博文 (Hirofumi, TOKU)

元邑久光明園・看護師